

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『山家集』の「ひま絶えにけり」について
Author(s)	田中, 政幸
Citation	国文学攷, 242 : 1 - 10
Issue Date	2019-06-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049723
Right	Copyright (c) 2019 by Author
Relation	



『山家集』の「ひま絶えにけり」について

田 中 政 幸

はじめに

ある事柄を確認するため、『山家集』（新潮日本古典集成本）を読み始めたところ、当初の目的とは別の、次の第10番歌（上・春）の解釈に引っかけた。

【集成】題しらず（〔頭注〕『山家集』『心中集』の詞書によれば、「山水春を告ぐ」といふことを、〔仁和寺の〕菩提院の前齋宮（齋院の誤り。上西門院統子のこと）にて人々よみ侍りにしに）

10 春知れと 谷の細水 洩りぞくる 岩間の氷 ひま絶えにけり^①
これの現代語訳を見ると、

春になったことを知ればかり、谷川の細い流れが洩れてくることだ。岩の間にはっていた氷が春風によって解け初め、隙間もできたのだなあ^②。

とある。一読して、結句の「ひま絶えにけり」を、「隙間もできた

のだなあ」と解するのが、今一つ腑に落ちなかった。

一 その他の解釈

そこで、他の注釈書の解釈を見た。刊行の早いものから掲げる。

【詳解】第一巻春上

春しれと谷の下水もりぞ来るいはまの水ひま絶にけん

家集に此歌谷の細水と有用かたし。又けりはけんの寫誤也。はるをしれとて谷水もりくるに、さては岩間の氷もとけにけん^③と也。けれと治定すべき歌に非ず。依改^④之此前後とも山家の歌と見ゆ^⑤。

【新釋】第二篇 四季の風物

春知れと谷の下水洩りぞ来る、岩間の氷隙絶えにけり。

□いかなつれなき氷も、終に自然の當然の推移には、抵抗が出来ぬ。春はいよ／＼深くなつてゆくのである。^⑥

【大系】上・春／題しらず

10 岩990 春知れと谷の細水洩りぞくる岩間の氷ひま絶えにけり

10 家集。心中集「山水春を告ぐるといふことを、菩提院の前齋宮にて人々よみはべりしに」。……。○岩間の氷ひま絶えにけり―岩間に張りつめていた氷が融けて、隙間が見えてきた。○作者の「岩間とぢし氷もけさはとけそめて昔のした水みちもとむらむ」(新古今一)を参考。

【全釈】上・春／題しらず

12 6990 春しれと昔の下水もりぞくる岩間の氷ひま絶えにけり

○題しらず……。ただし心中集には「山水春を告ぐるといふことを、菩提院の前齋宮にて人々よみはべりしに」とある。○ひま絶えにけり―氷が解けて隙間ができるの意であろう。この語はちょっと考えると不合理なようでもあるが、世俗「すきまがあく」、「ほころびがきた」などという表現が用いられているのを思いあわせれば、理解できよう。……。〔余説〕新古今集春上に採られている西行の「岩間とぢし……」(七七)とは、同工異曲と言える。しかし、受ける感じは山家集の方が動的で、新古今の方は静的である。後拾遺集第一には和泉式部の歌で「春霞たつやおそきと山がはの岩まをくぐるおと聞ゆなり」(二三)というのがある。……。

【全注解】上・春／題しらず

17 春知れと谷のはそ水もりぞくるいはまの氷ひまたえにけり

西「初春」西一本「山水春をつくるといふことを菩提院前齋宮にて人々よみ侍りしに」心「西一本と同じ詞書あり」

〔詠〕……。……氷が解けて隙間が見えて来たことだ。

〔考〕……。尾山「評釈」によれば、この歌は後拾遺集和泉式部の歌「春がすみ立つやおそきと山川の岩間をくぐる音きこゆなり」の換骨奪胎の作で、……。類想歌一九三九「岩間とぢし……」

【新大系】(山家心中集) 山里を春立つつ、といふ事を

160 春知れと谷の細水もりぞくる岩間の氷隙たへにけり

……張りつめた氷が解け、隙間が切れたのだなあ。○山里を……底本「山里を」の「を」に「に」と傍書。他本「山水春を告ぐ」といふことを菩提院の前齋宮にて人々よみ侍りしに」。底本は、山家集「山里は霞みわたれるけしきにて空にや春の立つを知るらむ」の詞書が混入したものか。……。▽谷川の「東風解氷」。「春霞立つや遅きと山川の岩間をくぐる音聞こゆなり」(後拾遺集・春上・和泉式部)に触発されたか。山家集後数年以内の題詠と思われる。

【集成】既出、注(一)。

【和歌大系】上・春／題しらず

10 春知れと谷の下水漏りぞ来る岩間の氷隙絶にけり

10 ……。張りつめた氷が解けて隙間ができたのだ。……。▽「東

風解氷」の趣向。⁽⁹⁾

【角ソ】上・春／題しらず

10 春知れと谷の細水洩りぞ来る岩間の氷ひまた絶えにけり

春を知れと。漏れて来る谷川の細流が春を告知すると擬人化。

東風解氷。⁽¹⁰⁾

現在までに参照し得たのは以上である。その違いを云々する前に、

「隙絶ゆ」の使用例がもう一例あるので、見ておこう。

二 「小芹摘む」歌の「ひまたえて」の解釈諸説

第984番歌 中・雑／題しらず 「小芹摘む 沢のこほりの ひまたえて

春めきそむる 桜井の里」である。注解のあるものを刊行順に掲げる。

【大系】中・雑／題しらず

984 7977 小芹摘む沢の氷の隙たえて春めき初むる桜井の里

隙間が見えて。家集「隙見えて」(家集は「西行法師家集 異本山家集」)

【集成】

少しく隙間ができて、⁽¹³⁾

【全注解】中・雑／題しらず

1067 小芹摘む沢の氷の隙たえて春めきそむる桜井の里 (サ)は「西

行法師家集」)

【訳】……氷の隙間が見えて⁽¹⁴⁾

【新大系】(山家心中集) 雑上

135 小芹つむ沢のこほりのひまたえて春めきそむる桜井の里

張りつめていた氷の裂け目が離れたし、……。▽「東風解氷」

の観念を核とする「若菜」詠。……。⁽¹⁵⁾

【和歌大系】下・雑／題知らず

984 小芹摘む沢の氷のひまたえて春めき初むる桜井の里

……。その沢に張った氷も春風に解け出して、……。○氷の隙

絶えて一氷が少し解け始めて。東風解氷をいう。……。▽立春

詠。……。⁽¹⁶⁾

【角ソ】中・雑／題しらず

984 小芹摘む沢の氷のひまたえて春めきそむる桜井の里

春風により氷が切れ隙間ができて。東風解氷。⁽¹⁷⁾

「ひまたえにけり」と「ひまたえて」に使われている「ひまたゆ」

の解釈を問いたい。

諸説を整理する前に、私案を提示する。

三 私案の提示

初心に戻り、定評のある複数の辞書を参照し、「品詞分解」して、

逐語訳してみる。

「ひま」は、「隙間」で動かないだろう。「たゆ」は、語源とされる「中

途で切れる」でなく、派生した「尽きる。無くなる」の意と考える。

「にけり」は、「に」(完了) + 「けり」(気づきの助動詞・詠嘆)で、以上を

繋げば、「解け残った氷が形成していた隙間がすっかり無くなってしまったのだなあ」となる。

四 「ひまたゆ」の解釈整理

次に、a「ひまたえにけり」とb「ひまたえて」とに使われる「ひまたゆ」の解釈諸説を整理してみる。

【集成】 a・bともに「隙間ができる」

同様の解釈をしているのが次のとおりである。

【全釈】 a「隙間ができる」

【新大系】 a「隙間が切れる（即ち、できる）」・b「裂け目が離れ
だす（即ち、隙間ができる）」

【和歌大系】 a「隙間ができる」・b「少し解け始める（即ち、隙
間ができる）」

【角ソ】 b「隙間ができる」

次の二例、

【大系】 a・bともに「隙間が見える」

【全注解】 a・bともに「隙間が見える」

は、ともに、先に見たとおり、「小芹摘む」歌で、bの異文「ひまみえて」を掲示していた。ともに、aの注解においては、bの異文について言及が無いけれど、【全釈】が言うように、「この語はちょっと考えると不合理なようでもある」と受け取ったのではないか。そ

れで、「ひまたえ」よりも「ひまみえ」に引かれ、a・bを「隙間が見える」と解した可能性がある。

なお、「隙間が見える」とは、「隙間の存在」が前提となっている。隙間を形成する氷が解け残っている状態である。存在しないものは、見ることができない道理である。

「隙間ができる」と「隙間が見える」とは、隙間が存在している点では共通している。それを一方では「できる」と言い、一方では「見える」と言っている。

問題は、「ひま見ゆ」を「ひまが見える」と解するのは可であるけれど、「ひまたゆ」を「ひまができる」と解するのは不可とすることである。このことは、また後で触れる。

残るは、【詳解】と【新釋】である。

【詳解】 a「岩間の氷もとけにけん」は、「岩間の氷もすっかり解けてしまったのであろう」と解せる。

【新釋】のa「終に自然の當然の推移には、抵抗が出来ぬ」は、「季節が移り、気温が高くなってゆけば、当然に氷も解けてゆかざるを得ない」、即ち、「氷がすっかり解けてしまった」と解せる。だから、「春はいよ／＼深くくなってゆくのである」という説明が付くのである。私案の「解け残った氷が形成していた隙間がすっかり無くなってしまったのだなあ」と同じ解釈と言える。

では、「隙間ができる」と、どちらが納得できる解釈であるか。

ここで、他の用例について見ておきたい。

『新編国歌大観』第一巻／第十巻（角川書店、一九八三～一九九二年）の各句索引で、a「ひまたえにけり」・b「ひまたえて」の用例を確認した。

aは、第三巻に二例有るのみで、同書の略称で記せば、「125山家一〇」「126西行家二」、つまり、当該歌「春知れと……」だけであった。他の巻には無かった。

bは、第二巻に二例、「14新六帖六七」「16夫木二四七七五（巻第三十雜部十三）さくら井のさと、桜井、山城或撰津／家集／西行上入」で、後者は、「小芹摘む……」である。

次いで、第三巻に一例、「125山家九八四」、これも「小芹摘む……」である。

そして、第十巻に一例、「1為家千三七」。

結果、次に掲げるbの二例のみが、西行の詠歌以外の用例となる。

うづき

A花ちりしこずゑのみどりひまたえてしげりはじむるなつのか

げかな（14新六帖六七）

夏百首

Bふるさとのきのしのぶのひまたえてふくともみえぬあやめ

ぐさかな（1為家千三七）

適宜、漢字を当ててみる。

A花散りし梢の緑隙絶えて繁り始むる夏のかげかな

B古里の軒のしのぶの隙絶えて葺くとも見えぬ菖蒲草かな

Aは、「花が散った後、梢の葉が大きく育つにつれ、葉と葉、梢と梢との間の隙間が無くなって、全体としても、葉が生い繁り始める夏の姿となったことよ」、Bは、「夏となり、古里にある家の軒端のしのぶが、隙間無く生い繁っているので、菖蒲草を軒端にさしかざしても、しのぶに紛れて目に入りにくくなっていることよ」と解釈できよう。「隙間ができる」では、詳説は省くけれど、一首全体の意が通らない、と考える。

従って、『新編国歌大観』の各句索引で見られる限りの「ひまたえにけり」「ひまたえて」は、「春知れと」歌も含め、いずれも「隙間が無くなる」意で使われていると判断できた。

ただ、注意すべき点がある。A・Bの「隙間が無くなる」は、その結果、全部が塞がる意となる。しかし、「春知れと」歌の「隙間が無くなる」は、全部塞がってしまったては、冬に逆戻りなので、隙間を形成していた解け残りの水も解け切り、その結果、岩間の水が全部無くなったという意になる。A・Bとは逆に、全部が塞がるのではなく、塞いでいたものが全部無くなる意なのである。

五 なぜ「隙間ができる」と解するのか

前掲した【全釈】曰く、「この語はちょっと考えると不合理のよ

うでもあるが、世俗「すぎまがあく」、「ほころびがきた」などという表現が用いられているのを思いあわせれば、理解できよう」と。そして、「新大系」が「隙間が切れた」と言う。

何故か。この両歌を「立春」を詠んだものと受け取っているからではないか。

【集成】の頭注に、こうある。

「岩間とどし水も今朝はとけ初めて苔の下水道求むらん」(『御裳濯河歌合』二一番巻)と詠まれる、立春の日に解け初め道を求めていた水が、やがて谷の細水となって洩り出てきたさまを詠じた歌。¹⁾

立春の日に、氷が解け始めてから、水が細水となって洩れ出てくるまでに、どれほどの時の経過を要すると解しているのか。それは、「やがて」の意味の捉え方で変わる。

例えば、手許にある『角川必携国語辞典』²⁾を見ると、「やがて」は、こう記述される。

①あまり時間のたたないうちに。「列車は―みえなくなつた」
「一三年になる」³⁾ まもなく・じきに②それに続く結果として。結局は。「小さな努力が―大きな成果をもたらす」

【古語】現代語では「そのうちに」という意味で、ある程度の時間のへだたりをあらわすが、古語では多くの場合「すぐに」という意味だった。また、状態がそのまま続くこともあらわした。細水が洩り出てくるのが、立春の日のうちとも取れるし、立春の

日以後とも取れるのではないか。どちらであろうか。判断しがたい。さて、「岩間とどし……」について、次のような注記がある。

▽礼記・月令「孟春之月、東風解氷」⁴⁾を詠む「袖ひちて結びし水のこほれるを春立つ今日の風やとくらむ」(古今・春上・紀貫之)に代表されるように、立春になると氷がとけ始めるといふ観念があった。⁵⁾

【集成】が「ひまたゆ」を「隙間ができる」と解したのは、『新古今集』にも入集(春歌上・題しらず・第七番歌)している「岩間とどし……」と同じ「立春」の歌と受け取ったのであろうか。「立春になると氷がとけ始めるといふ観念」に引きずられたか。

しかし、【大系】【全釈】【全注解】【集成】【新大系】が注記しているように、「春知れと」歌は、「山水春を告ぐ」の題詠と考えられる。

また、東風が氷を解かすのであるが、立春の日に一度に解かしてしまう場合だけでなく、場所によって差異があるはずだ。次に、各集で置かれている位置を確認してみよう。

I 【集成】の『山家集』では、春の部で、詞書「立つ春の朝よみける」で第1〜4番歌、「山里に春立つといふこと」で第7番歌が置かれ、第10番「春知れと」歌の詞書は「立春」でなく、「題しらず」である。

II 『西行法師家集』では、詞書「初春」で、

1 岩間とどし水も今朝はとけそめて苔の下水道みちもとむらん

2 ぶりつみし高ねのみ雪とけにけり清滝川の水の白浪

3 立ちかはる春をしれとも見せがほに年をへだつる霞なりけり

4 くる春は嶺の霞をさきだてて谷のかけひをつたふなりけり

5 こぜりつむ沢の水のひま見えて春めきわたる桜井の里

6 春あさみずのまがきに風さえてまだ雪さえぬしがらきの里

7 春になる桜がえだは何となく花なけれどもむつまじきかな

8 すぎて行く羽風なつかし鶯よなづさひけりな梅の立えに

9 鶯はひなかの谷の巢なれどもだみたる音をば鳴かぬなりけり

10 かすめども春をばよその空にみてとけんともなき雪の下水

11 春しれと谷の細水もりぞ行く岩間の氷ひまたえにけり²²⁾

と排列され、当該歌が末尾に置かれている。

第5番の第三句が「ひまたえて」でなく「ひま見えて」とあるの
で、第1番、立春で水が解け始め、第5番、隙間ができたのが見え
て、末尾の第11番で、すっかり解けてしまった、と解せば、張り詰
めていた水が時の経過につれて、解け果ててしまいうまでを追って
ることになる。これであれば、第5番「こぜりつむ」と第11番「春
しれと」との納まりが良い。

III 『別本山家集』では、「春歌」の部で、次のようにある。

難波^{わか}わたりにすみける比立春の心を

いつしかも春きにけりな津の國の難波のうらをかすみこめたる
かたかへに志賀のさとへまかりける人にくして三日に帰

りけるにあふ坂山のかすみを見て

わきてけふあふ坂山のかすめるは立をくれたる春やたつらん

春しれと谷のはそ水もりそくる岩間の氷ひま絶にけり

かすますはなにをか春とおもはましました雪さえぬみよしの、山

海邊霞

もしは焼うらのあたりは立のかてけふりあらそふ春かすみかな²³⁾

この五首の排列は、【集成】と同じであるけれど、詞書にそれぞ
れ異同が有る。特に、「春しれと」歌は、この本では独自の詞書が
無いけれど、【集成】では、「題しらず」とあった。

【集成】もこの本も、「春しれと」歌の前後は、霞を詠んだ歌であ
るから、霞を詠まぬ歌が一首だけ浮いてしまっている。両集ともこ
の排列では、当該歌の落ち着きが悪い。

IV 『異本山家集』²⁴⁾では、冒頭の「春部」^{まのぶ}に、II 『西行法師家集』
の第1番歌から第7番歌までと、第9番歌とが、同順で排列され
ている。しかし、第8・10・11番が欠けている。「春しれと」歌は、
この本の他の所にも無い。

V 『山家集類題』では、「春歌」の部で、

題しらず

春しれと谷の下みづもりぞくる岩間の氷ひま絶えにけり
小ぜりつむ澤の水のひまたえて春めきそむる櫻井のさと
くる春は嶺の霞をさきだてて谷のかけひをつたふなりけり

雪とくるしみ、にしだくから崎の道行きにきあしがらの山^②
この編者は、「立春」の題の中に、「春しれと」「小ぜりつむ」と
を入れていない。

VI 日本古典全書本では、次のようにある。

山水春を告ぐるといふ事を、菩提院前齋宮にて人々よみ
侍りし

17 是るしれと谷のはそみづもりぞくろいはまの水ひまたえにけり
18 かすまはずはなにをか春とおもはましまだ雪きえぬみよし野の山^③
その頭注に、17 番歌の詞書は、『山家心中集』に拠ったものであり、
18 番歌は、『続後撰和歌集』巻第一に「春歌中に」の詞書で入集し
ている旨、記されている。ともに立春当日の歌と解されていない。

次に、春の部で「立春」と「氷」を詠む歌を『古今集』で見つめる。

ふるとしに春たちける日よめる 在原元方

1 としのうちに春はきにけりひととせをこそとやいはむことし
とやいはむ

はるたちける日よめる 紀貫之

2 袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

(中略)

寛平御時きさいの宮のうたあはせのうた 源まさずみ

12 谷風にとくるこほりのひまごにうちいづる浪や春のはつ花^④
第12 番歌の「こほり」は、まだ完全に解けていない。隙間を作れ

るだけの水が残っている。この状態の水が、もう少し時を経ると、
当該歌の「ひま絶えにけり」となる、と解したい。

さて、周知のように、『古今集』では、例えば、桜の咲き始めから、
散り果てるまでの順序で、桜を詠んだ歌が排列されている。

水にも、解け始めから、解け終わりまでの経過がある。そういう
目で見れば、前に見た『西行法師家集』の排列が、その経過を示し
ている。その排列の順を尊重し、その経過を踏まえて解釈してゆけば、
「春知れと」歌の氷の状態を見誤ることはなかったのでは、と考える。
また、「春知れと」歌に対して、「山家集の中に、これ（岩間とちし）
歌^⑤引用者注に似た歌が一首あります。大した歌ではありませんが、
参考までに引きます」という人もいる。こういう評価も、これまで、
丁寧な考察の対象になって来なかった一因となっていようか、と推
測される。

六 大した歌でなくとも再検証

さて、参照できた限りの解釈で、私案と同じものは、【詳解】(一九二
一年・明治四四年刊、岡野^{ニホノ}、(二七四四～一八〇二年)『増補山家集抄』の翻刻書)と、【新
釋】(一九三三年・大正一二年刊)とであった。

「隙間が見える」「隙間ができる」という「隙間が存在する状態」
と解するのは、【大系】(一九六一年刊)から始まっている。【大系】の
注記の要点は三つである。

(1) 『山家心中集』では「山水春を告ぐるといふことを、……」
という詞書を持つ。

(2) 『新古今集』入集歌「岩間とちし……」を参考歌とする。

(3) 「隙間が存在する状態」と解する。

これが以後の注釈に引き継がれていったように見える。

(1)の「山水春を告ぐる」は、「東風解氷」で、即ち、「立春」と連想された。

(2)は、『後拾遺集』の和泉式部の「春霞立つや遅きと……」とともに、「春知れ」と歌も「立春」(当日)の歌と解する誘因となった。

(3)は、(1)と(2)との帰結で、「立春の日に、氷が解け始める兆しの隙間が見え、もしくは、できてきた」と解釈せざるを得なくなつた、と考ふる次第である。

おわりに

以上、参照できた先学の説をもとに考察した結果、「春知れ」と歌のあるべき姿、元の姿は、次のようになるろう。

山水春を告ぐ(る)

春知れと谷の細水洩りぞくる岩間の水ひま絶えにけり

そして、「ひま絶えにけり」は、【詳解】【新釋】の解釈に立ち戻るのが適切と考ふる。

解釈の私案を提示する。

山から出る水が春到来を示しているという題で

春になったと見定めよ。眼前の谷には、細い水の流が漏れて来ているぞ。今や、岩と岩の間に張り詰めていた氷は、隙間が發生する時期も通り越して、すっかり解けてしまったのだなあ。

氷が解け始める立春(袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ)「春霞立つや遅きと山川の岩間をくぐる音聞ゆなり」「岩間とちし水もけきはとけそめて苦のした水みちもむらむ」、次いで、氷の隙間が目につくようになり(谷風にとくるほりのひまごころうちいづる浪や春のはつ花)「小芹摘む沢のこほりのひま見えて春めきをむる桜井の里」、結句、隙間を形成する解け残っていた氷も消滅する時期を迎え、「春はいよ／＼深くなつ」たのである(春知れと谷の細水洩りぞくる岩間の水ひま絶えにけり)。

「大した歌」でなくとも、本意に合った解釈を求めてゆきたい。

〔注〕

(1) 後藤重郎校注『山家集』新潮日本古典集成、新潮社一九八二年一刷、二〇〇七年九刷、一二頁。傍線は引用者、以下同じ。

(2) 釋固浄著・梅沢和軒校『山家集詳解』武蔵屋書店一九一一年(明治四四)、バルトス社一九九二年(平成四年)復刻版、八頁。

なお、念のため、私の解釈を記しておく。

「西行法師・家集」では、この歌の第二句は、「谷の細水」とある。しかし、それは採用し難い。また、結句「ひまたえにけり」の「けり」は、「けん」の写し誤りである。春が来たことを知れとばかりに谷の水が漏れて流れて来るのであるから、そうか、岩の間に張りつめていた氷も、も

う解けてしまったのであるうと合点するのである。だから「けれ（電網公開の『山家集抄（増補山家集抄）』寛政七年刊、宮内庁書陵部所蔵、函号二六・三二一、四四ノマ／全二八ロフ（http://kaseru1.nijl.ac.jp/view/frame.jsp?PB_ID=G0003917KT&C_CODE=KSRM-420805）を見る）、「れ」ではなく「李」を字母とする「り」であった」と決定すべき歌ではない。それで「けり」を「けん」と改めた。この歌の前（岩まとし水もけさはとけそめてこけの下水道もむらし）と後（三笠山はるを音にてしらせりこほりをた、く篤のたき）の歌はともに「山家（サンカ・やまが）」、即ち、山中のありさまを詠んだ歌と判断できる。

- (3) 尾崎久彌・類聚 西行上人集新釋『修文館一九二三年（大正二二）、七八〜七九頁。
岩波書店一九六一年、二二頁。
- (4) 風巻景次郎校注『山家集』、日本古典文学大系29『山家集 金槐和歌集』岩波書店一九六一年、二二頁。
- (5) 平野宣紀『山家集全釈（一）穂波出版一九六九年、九頁。なお、和歌引用の際、原文で、頭に付けられた歌番号が漢数字の場合、印刷の都合上、アラビア数字に直す。以下同じ。
- (6) 「評釈……西行法師名歌評釈（尾山篤二郎）」、注（7）の「例言」。
- (7) 渡部保『西行山家集全注解』風間書房一九七一年、五五二頁。
- (8) 近藤潤一校注『山家心中集』、新日本古典文学大系46『中世和歌集 鎌倉篇』岩波書店一九八一年、三〇〜三二頁。
- (9) 西澤美仁校注『山家集』、和歌文学大系21『山家集／聞書集／残集』明治書院、二〇〇三年、五頁。
- (10) 宇津木言行校注『山家集』角川ソフィア文庫、KADOKAWA二〇一六年、一〇〜一一頁。
- (11) 注（1）の二七五頁。
- (12) 注（4）の一七三頁。

- (13) 注（11）に同じ。
- (14) 注（7）の五五二頁。
- (15) 注（8）の二六頁。
- (16) 注（9）の一八四頁。
- (17) 注（10）の一六二頁。
- (18) 大野晋・田中章夫編、角川書店一九九五年。
- (19) 「月令第六」孟春之月、……東風解凍、蟄蟲始振、魚上氷、獺祭、魚（鴻鴈來。「孟春の月、……東風凍を解き、蟄蟲始めて振き、魚氷に上り、獺魚を祭り、鴻鴈來る」、市原亨吉・今井清・鈴木隆一『礼記 上』全釈漢文大系12、集英社一九七六年一刷、一九八二年三刷、三七七〜三八〇頁。
- (20) 久保田淳・吉野朋美『西行全歌集』、『御裳濯河歌合』第22番歌「岩間とぞし……」の補注。岩波文庫二〇一三年、四五七頁。
- (21) 『新編国歌大観 第三卷 私家集編I 歌集』角川書店一九八五年。
- (22) 『平安私家集』日本古典文学影印叢刊8、貴重本刊行会一九七九年、三四四頁。
- (23) 『山家集 御裳濯河歌合、宮河歌合』所取「異本山家集（天文七年本）」新典社善本叢書3、新典社一九七七年。
- (24) 佐佐木信綱校訂『新訂 山家集』岩波文庫一九二八年第一刷、一九七六年第三刷、一六頁。
- (25) 伊藤嘉夫校注『山家集』日本古典全書、朝日新聞社一九四七年初版、一九六〇年第六版、二九頁。
- (26) 『新編国歌大観 第一卷 勅撰集編 歌集』角川書店一九八三年。
- (27) 森重敏『西行法師和歌講読』和泉書院一九九六年、五頁。